

辰野
隆

逝ける人々

逝ける人々

石本巳四雄博士

今年、二月四日は日曜だった。朝、九時頃、鈴木信太郎君から電話がかかった。石本の容態が極めて危険だ。もう時間の問題らしい、直ぐに坂口内科の病室に来てくれと。僕は愕然とした。二三日前から就寝しているとは聞いていたが、これほど急激に悪化するとは全く思い設けなかった。僕は取るものも取り敢えず家を出た。吉祥寺からお茶の水までの途がひどく長く思われた。十

日ばかり前の夜、僕等の仲間が会食した時、久しぶりで出席した石本君の何処となく窶やつれた姿を不ふ凶と思い浮べた。「衰えたな」と窶ひそかに感じたのだったが、今はもう衰えたどころではない。火が消えかかっているのだ。

内科病室の入口で待っていて呉れた鈴木君と久能木君の後に従って、僕は惧おそる惧おそる病室にはいつていった。骨肉親戚に取り巻かれて、石本君は昏睡状態で横わっていた。枕頭には、中学以来の親友尼子博士が彼の脈を絶えず検していた。僕は垂死の病友を長く正視するに堪えなかつたので、直ちに廊下に出て、呆然とした形で、窓か

ら上野の森を徒いたずらに眺めていた。それから間もなく臨終が来た。周囲の涕泣の声を耳にしながら、僕等の仲間も石本君の唇を濡らして心に今生の別れを告げた。

僕が石本君と親しく語り合うようになったのは今から二十数年前、鈴木信太郎君を介してであった。物理学を専攻しながら、絵画や音楽や文学にも深い愛着を抱いていたのが、僕等仏文学の連中と石本君とを永く結び付ける楔くさびとなつたのである。

大正十年の夏、巴里パリで、僕は一足さきに日本を発つた山田珠樹君と落合つた時、モンマルトルの山田君の下宿

に石本君も訪ねて来た。三人がカルチエ・ラタンの同じ下宿に住むようになったのは翌年一月からであった。石本君は毎日、物理学の大家ランジュヴァン教授の実験室に通って、孜々ししとして研究にいそしんでいた。山田君と僕はソルボンヌパリ大学の文科の講義を弥次ったり、芝居を觀たり、音楽を聴いたり、絵を眺めたりして至極呑気な月日を送っていた。三人のバリ生活の回想は二十年を経た今日でもなお新しく楽しく、その思出の世界では亡友も今なお潑刺として生きている。

或夜、いつものように石本君と僕は山田君の部屋に会

して、三人は時の移るのも忘れて絵画論に耽った。談偶々たまたまレンブラントに及んで、石本君が、「俺はレンブラントなんか嫌いだね。何処が佳いんだ、あんなもの」と極めつけたのがきっかけになって、山田君と僕は、石本君の暴論を攻撃し始めた。由来、石本君には依怙地いこじと思われ、るほど頑固な一面があった。一般に第一流と認められて、いる芸術家や学者に対しても自らその長所の証拠しかを確と握らぬ限りは、それを無価値と断ずる——論理の飛躍の癖があった。この癖の故に彼は往々にして、あらゆる誤解を招いたこともあったかと思われる。然し、僕等

の仲間には、彼の頑かたくなさや飛躍論理が却って一徹な愛嬌として無条件に受け納れられていたのである。レンブラントに対する彼の暴論にいきり立った山田君が、

「議論なんかいくらやっても糞の役にも立たないぞ。俺達の日で、実物を観ながら是非を極めようじゃないか。

明日あしたの夕方までに旅券の手続をすませて、明日の夜、三人揃ってアムステルダムへ往こうよ」と云い出した。「よし往こう」「往くとも」と三人の意見が立所に一致して、その翌日の夜、三人は巴里の北停車場を発って、オランダのアムステルダムまで、レンブラントの大作『夜警』

を觀に出かけたのである。

結局『夜警』のタブローの前に立っては、流石さすがの石本博士も恭々しく脱帽して、山田君と僕に対してと云うよりも寧むしろレンブラントに降参したのであった。

大正十一年の夏、山田君とロンドンで別れて、僕はスカンジナビアを巡り、山田君はベルリンに赴いたが、その間、石本君はバルカンから伊太利方面イタリヤの旅に出かけて行つた。秋に入つて、三人が再た巴里の下宿で暮らすようになった。秋に入つてから、石本君は伊太利の麗しさを今更のよ

うに讚美し始めた。殊にヴェネチヤの水と街とを激賞して措おかなかつた。

——ヴェネチヤの往来という往来が悉く水路なのは實際行つて見なければ、あの味は判らないよ。グラン・カナルをゴンドラに乗るのも楽しいが、小蒸ラ気船シに乗って巡るのも非常に面白かつた。岸が近づくと船長が「アダアジオ！」って呼ばわるんだ。すると船が速力を落して静かに岸に着く。

——マ・ノン・トロツポ、と云わなかつたかね。

——そいつは聞きもらしたが、アダアジオは嬉しいじ

やないか。凡てこれ音楽だ。と云って石本君は悦に入っていた。

彼と僕とは幾度も相携えて、グラन्द・オペラやオペラ・コミックの夕べを楽しんだ。夜晩く、最終のバスに乗って、サン・ミシエルで降りると、二人は左に折れて、エコオル街を過ぎ、モンジュ街に出て、ぶらりぶらりと宿まで帰って来る。そういう時に、いつでも石本君は僕を顧みて嬉しそうに、「ねえおい、全く巴里という都は大した都だなあ！」と云って感歎するのがきまり文句だった。

冬になると、石本君の部屋の窓から紐ひもをつけた寒暖計がぶら下げられる。彼は朝、起きると早速窓を開けて、寒暖計をたぐり寄せ、寒さを計るのだった。寒さが零度以下に降らなければ彼は決して股引カルソンを穿はかない。じかにパンタロンずぼんに脚を通すのである。零度以下になると、渋々股引を用いる。然し、結局早起をした時には股引が入用になり、朝寝をした時にはずぼんだけで済みますのだが、夫子自らは、その誤差を認めてはいなかった。

石本君の部屋には月三十法フランで借りて来た古ピアノが据えてあった。時々ベエトオヴェンやシヨパンの譜面に

向って鍵盤をでたらめに叩きながら、ベートオヴェンは偉大だなあ、とかシヨパンも悪くないなあ、などとしきりに感服していることもあった。音楽の鑑賞家としては、ドビュツシイやラヴェルやストラヴィンスキイを推奨していたが、弾奏者としては、常にベートオヴェンとシヨパンに限られていた。而も一度彼の手にかかっては、流石のベートオヴェンもシヨパンも結局同じ雑音にすぎぬのが却って愛嬌だった。

石本君は時々気が向くと油絵を描いていた。或日、一氣に自画像を描き上げてすこぶ頗る得意だった。彼の顔は誰

が見ても満月のように円かったが、出来上がった自画像は洵にすつきりした瓜実顔になっていた。

僕は巴里に行^{こうり}き行李をおろして、初めてシヤトレ工座のマチネでベエトオヴェンの第九交響樂を聴いたが、演奏が愈々フィナアレに入つて、大コオラスの歌い出される前に、セロやヴィオロンが幾度となく繰り返す同じメロデイに僕は揺られて、ついとろとろと眠つたかと思つたと、不意に傍の石本君が僕の横腹を拳骨で、ぐんと突いた。ハツと目を覚ますと、彼は僕の耳元で、「樂聖の大音樂を聴きながら眠る奴があるかい」と叱るように囁^{ささや}いて、

睨めた。

前後して巴里に集まった石本、山田の両君も僕も二年の留学期を了えて、前後して帰朝した。つい昨日のようにも思うが、いつの間にか二十年の歳月が流れ去った。僕と専攻を同じくする山田君は七年前に重い病に罹って鎌倉に引退し、今なお静養に努めている。石本君は帰朝後、地震学の研究を積んで、幾多独創的の所見や実績を遺し、更に将来の大成を期待されつつ愈々努力精進していたのに、天は彼の貴重な性命を寿に先だつて奪つたのであった。

吉江喬松博士

二月初めに年来の親友石本君を失った僕は三月の下旬に至って、更に、我等仏蘭西文学専攻学徒の先輩でもあり、その高朗な襟懷きんかいと深き学識とを以て絶えず我等を教え、導いた吉江博士と別れる悲しみに会した。

大正九年の三月末、僕は早稲田大学から新学年の仏蘭西文学の講義を担当して貰いたいという交渉を受けた。

吉江さんが新学年から開講する筈であったのが、帰朝が少し後れることになったので吉江さんが帰朝するまで、講義を受け持って呉れという依頼だった。当時、僕は東大文学部の講師として、学生に仏蘭西語の初歩を教えていたが、未だ仏文学の講義は試みたことがなかったので、甚だ心もとなかったけれど、九月になれば吉江さんも帰って来られるだろうと思つて、僕は依頼に応じて、曲りなりにも一学期の講義をすませた。

九月の或日、教員室で、僕は始めて新帰朝の吉江さんに会つたのである。黒いネクタイ、黒い背広、黒いずぼ

んで、喪服の人か、或は仏蘭西のミツシヨン・スクウルの教師とでも云った、極めて地味な服装であつた。而もその言動が至つて静かで和やかで、初対面の僕は頗る穏やかな印象を受けた。殊に微笑を含んだ、優しいその眼には僕は最初の一瞥から惹きつけられた。慈眼と黒い服装、その後二十余年間、その沁々とした印象は竟に易ついでわることになかつた。吉江さんは極めて鄭重に而も温情を込めて、僕の一学期の労を謝した後、改めて自分も未だ歸つたばかりで、疲労しているから、差支えなければなお当分お手伝いを願ひ度い、もし出来るなら、学年の改

まるまで講義を続けて下さらぬかという話であった。既に吉江さんが帰朝された以上、僕はいつまでも留まる可きではなかったが、一目吉江さんを瞥みると、何となく、この仁と俄かに離れ度くない気持が自ら起つて来たので、言下に吉江さんの懇請を受諾したのだった。それと、いうのも、嘗て僕の愛読した国木田独歩が何かの折に、自然詩人吉江孤雁を推奨した一文を読んで以来、孤雁の名に拠って発表された数種の随筆や紀行を敬読した思出が初対面の印象とともに生々いきいきと甦よみがえって来たからであった。斯くて僕は吉江さんの驥尾きびに附して、楽しく翌年の

学年がわりまで講義を続行した後、仏蘭西へ出発したのであった。

僕が日夏耿之介氏と相識るようになったのは、二年間の留学期を了えて帰朝してからであつた。それ以前から、日夏氏の詩魂と学殖には蔭ながら敬慕の念を禁じ得なかつたのだが、交を結ぶに至つて、愈々その孤高な風格、その理知と感性の交錯から発する燐光的なパラドックス、一世を不可とするその作敵本能の痛烈さに愈々親しみを覚えた。而も日夏氏も吉江さんも俱に信州の名家の子であり、吉江さんにあつては完く掩おほい得た、両親の鍾

愛に漬った長男の我儘、わからずや、頑さと云った特質が日夏氏にあつては、その額に、眼に、口角に、時々生動するのを僕は常に快く味ったのである。加之、吉江さんは日夏氏の先輩であり、月下氷人でもあつたから、両大人の間はその郷土と学窓と文学と家庭とに依つて、而して信濃の山岳を背景とする人格に依つて固く結びつけられていたのである。

吉江、日夏両大人と鈴木信太郎君と僕の四人は揃つて相会う機会は罕まれであつたが、それでも、年に一回か二回は求めて会食し会談した。会えば必ず限りない話柄が

滾々^{こんこん}として湧いて尽きなかつた。

吉江さんの『仏蘭西古典劇研究』が上梓された時、僕はこれこそ、我等仏文学専攻の学徒の待望の書であると信じて、深き興味と敬愛とを以て読了した。

凡そ仏蘭西文学を学ぶ人々が絶えずその中心として留意する事を怠つてならぬのは、十七世紀ルイ大王治下の古典文学でなければならぬ。この古典主義は仏文学の前^やを継ぎ後を開く宝庫なのであるが、然し一般の学徒は動もすれば、この宝庫を固定化して、唯々仏蘭西流の古典主義的見解に捉われすぎるきらいがあるが、吉江さん

の研究はあくまで一日本人として、詩人的天稟てんぴんを備えた
学者が仏蘭西古典文学をその批判と鑑賞とを通過せしめ
て解説した、質実にして透徹な而も滋味ゆたかな論考で
あつた。この名著は一般向きの翻訳小説とは異つて、少
数の研究的読者から熟読されたにも拘らず、我等専攻の
学徒からは貴重な文献として今後も必読の書となるに相
違ない。

「中央公論」五月号に日夏氏の寄せた『吉江喬松博士と
自分』と題する一文には、吉江さんの核心に触れたパツ
サアジユが鮮すくなくない、一例を挙げれば「先生を世に詩

人といふが、正しくは散文で深く詩を行^やる流風の詩人であつて、その文学興味の焦点も、初めは自然文学に起り、その自然観入は個性的郷土的特色の夥しいもので、それが自ら社会的関心に拡大せられ、農民文学や海洋文学の提唱はそのあらはれに外ならなかつた。文学信条としては^{はなな}太だしい浪漫的著色のつよいクラシシズムで折目正しい秩序と静寧とが魂の安住所であり、世界の方向の向けどころであつた。」と云うが如き即ち之である。日夏氏の卓見に更に嘗て草した拙文の一端を蛇足として加えるなら、「もし吉江氏にして、その半生の一時期に於て、

仏蘭西文学の宝庫を探り、殊にその古典主義文学の精神に触れなかつたら、氏は恐らく、湖畔詩人の風豊を想はしむる淋しき旅の詩人となつたかも或は知れぬのである。それほど、氏の青春期の詩魂は自然の美しさに誘はれてゐたらしい。然し彼には、別に、モラリストとしての峻厳な一面があつた。名家の子として愛撫せられた少年期から、一家を支へ愛弟を養育した苦戦力闘の青年時代を経て、今日の学徳円満なる学者良師となるに至るまでの氏の異常な努力と貴い修養とは、いよいよモラリストたる根蒂こんたいを強固にしたのである。」

この尊敬すべきモラリストは数年前より、早稲田大学文学部長として、多年の蘊蓄うんちくを傾けて経綸けいりんの任に当るこ
 ととなった。而も氏の耿々こうこうたる良心は氏をして衰えゆく健康を顧みる暇なからしめた。殊に此二、三年間の衰弱は恰も数年前の日夏氏の寒心す可き衰弱を想わしむるものがあつた。幸い日夏氏は静養の余暇を得てその後殆ど本復の域に還り、僕等を限りなく悦ばせたが、惜しい哉吉江さんは激務に直面しつつ、竟ついに休沐加餐きゅうもくかさんの機を得る能わずして斃たおれた。惜しみても余りある痛恨事である。

(昭和十五年春)

日本文学電子図書館

逝ける人々

著 者：辰野 隆

制作者：宮澤一郎

底 本：「忘れ得ぬ人々と谷崎潤一郎」

中公文庫、中央公論新社

2015年2月25日 初版発行

日本文学電子図書館